

近代日本彫刻の潮流と石井鶴三《島崎藤村先生像》

- 星取り法と直彫りの対比を通して -

福江 良純 (京都府立京都八幡高等学校)

彫り物から彫刻へという、印象的な表現に集約される近代日本の彫刻にも二つの潮流があることは広く認められているところである。ここで言う彫刻とは、単なるカーヴィングを指すものではなくモデリングと併せて一つの姿を成す芸術の方法論のことである。潮流の一つは、明治9年、工部美術学校の彫刻教育に始まるラグーザの系譜。もう一つはそれに遅れること30余年、荻原守衛、高村光太郎らがロダンに感化される形でその息吹を日本に伝えたものである。この二派の対照性は、技術的アカデミズムと自然主義的ロダニズムの対立とも言われ、朝倉文夫と荻原守衛が揃って参加した明治41年の第2回文展において実質的に現れている。日本の近代彫刻の特異性は、西洋における長い歴史の変遷によって紡がれた異なる二つの芸術形式が、極めて圧縮された期間に連続して移入し、かつそれらが互いに反目しつつも同時に存続してきたという事実にある。

しかしながら、近代化という観念を以て彫刻を捉えようとした場合、二つの潮流を並列としてではなく、外形模写から造形表現の内部追究という主題の展開として捉える向きも少なくない。この場合、外形模写は技術的な問題と考えられており固有の技法が特定されているが、内部生命論にも喩えられる後者についての造形上の仕組みは明らかではない。本発表は、この対照的な彫刻の技術的背景を考察することにより、それぞれの主題が基づく造形上の要素を導き出す。そして、彫刻の造形性を技術的な方法論として描き出すことで、彫刻の近代性を明らかにすることを目的とする。

そこで、本発表は彫刻の近代化の過程で重要な技法上の転換が生じたことに注目する。星取り法から直彫りへの転換である。それは、彫刻の主題の変化と軌を一にするもので、彫刻の内部生命論が、星取り法では原理的に困難な造形要素を求めるようになったことと関係が深い。つまり、近代彫刻は意識的な星取り法の放棄と自覚的な直彫りの選択によって展開されており、したがって近代化の方法論とは、造形要素を自覚に選択する技法上の論理にあると言える。ここに関して、本発表が取り上げる石井鶴三には直彫り彫刻に関する有用な考察と、その実証的な制作である木彫代表作《島崎藤村先生像》がある。石井は、明治初年から始まる日本近代彫刻を幅広く見渡し、自らも主題の深化のために星取り法から直彫り法への転換を実行している。石井の語る造形論には「立体感動」、「凸凹のお化け」、「たんだ一本の線」など特徴的な造語が頻出する。しかしながら、それらを石井の実作とともに検証するなら、そこには近代芸術そのものを特徴づける意識性が働いていることが確認されるだろう。